

併例に有用であると考えられた。分離された結核菌の初回耐性頻度は2~10%で、総合耐性は6%であった。

7. びまん性胸膜中皮腫の1例

篠崎克己, 山口哲生, 渡辺昌平
(千大・肺内)
河野俊彦, 林 豊 (同・病理)

80歳。男性。主訴は右胸痛。他に咳嗽, 血痰, 労作時呼吸困難等の症状があり入院した。大量の血性胸水が見られ, 胸水中からは悪性細胞は証明されなかったが, 胸水中 LDH, フェリチンは血清に比して著明な高値を示した。全経過7ヶ月で死亡し剖検を行った。縦隔, 横隔膜, 臓側胸膜に一塊となった腫瘍が胸膜の外側をびまん性に浸潤し, 組織学的に線維型のびまん性胸膜中皮腫と診断された。

8. CHOP 療法が著効を示した非ホジキンリンパ腫の1例

頼 勝啓, 金子 昇, 内藤 隆, 橋爪一光
(県西浜松医療センター・呼吸器科)
鈴木昌八, 木村秀樹, 和田源司, 半沢 備
(同・胸部外科)

今回我々は CHOP 療法が著効を示した非ホジキンリンパ腫の1例を経験したので報告する。症例は検診にて縦隔腫瘍を疑われ, リンパ節生検及び臨床所見, リンパ管造影等の諸検査より, 病期ⅢAのび慢性中細胞型非ホジキンリンパ腫と診断された。本症例に CHOP 療法を施行し, 不完全寛解を得た。同療法は当院の過去7年間における非ホジキンリンパ腫の化学療法中最も高い有効率を認めた。

9. 血胸を伴った転移性肺腫瘍の1手術例

斎藤幸雄, 柴 光年, 佐藤展将
山口 豊 (千大・肺外)
安田耕作, 脇坂正美 (同・泌尿)

。辜丸腫瘍の肺転移巣からの出血で血胸を呈し術中 re-expansion lung edema が発生した1例を報告した。当科では過去12年間に3例の腫瘍性血胸があったが血管浸潤が強く, 出血を伴いやすい腫瘍の肺転移では血胸は重要な合併症であり念頭におかねばならない。又自然気胸で脱気後や胸水吸引後に発生する肺水腫が陽圧換気下で発症したことは肺血管の透過性の変化が主因となっていると考えられた。

10. 22歳女性の原発性肺腺癌の1例, および当施設の若年者原発性肺癌の検討

吉田康秀, 山口哲生, 渡辺昌平
(千大・肺内)
田中由紀夫, 山口 豊 (同・肺外)
水谷文雄 (松戸市立・内科)

咳嗽及び発熱を主訴とした22歳女性の原発性肺腺癌の症例を経験した。また, 1978年4月1日より1982年末までに当施設に入院した肺癌患者455例のうち, 40歳未満の若年者原発性肺癌19例について検討した。割合は全体の4.2%であり, 男女比は10:9であった。組織では腺癌が17例を占めた。また, 発見動機として自覚症を有していた者が多く, 病期はⅢ期以上が68%を占めた。手術施行例は6例であった。

11. 小細胞癌の2例, 最近の化学療法の考え方

河野典博, 加藤 文 (千大・肺内)

肺小細胞癌は肺癌の中でも転移が早く予後不良だが, 化学療法, 放射線療法に高い感受性をもつことが知られている。種々の化学療法が試みられているが, COMP療法による治療1例と AMP 療法による治療1例とを示した。現在も小細胞癌に対する化学療法は試行錯誤の時期で今後も慎重な検討が必要と思われる。なお当科では AMP 療法と AMC 療法の2つのプロトコールにより trial が現在進行中である。

12. YAG レーザーによる治療を加えた小細胞癌の1例

石橋かおる, 広島健三 (千大・肺内)
藤沢武彦 (同・肺外)

症例は, 57歳の男性で小細胞癌の再発例である。右主気管支はほぼ完全閉塞, 左主気管支は約90%閉塞しており, これに対してYAG レーザーを照射した。全身状態は改善し, 更に化学療法, 放射線療法を加えることにより, 延命効果が得られた。本例の様な中枢気道の狭窄病変に対してYAG レーザー照射療法は, 極めて有効な治療法である。

13. 肺部分切除における CO₂ レーザーの使用経験

田宮敬久, 崎尾秀彦, 田中由紀夫
馬場雅行, 山口 豊 (千大・肺外)

レーザーメスは, 出血量の減少・手術時間の減少等種々の利点がある。当施設に於ける CO₂ レーザーメスを